

できるかという、元気がよいのとバッティングが多少よくなった時期であったのと、走塁に自信があったんですよ。それでそれを前面に出して、練習に練習をかさねました。そうしたら、三年目の後期にやっと監督の目にとまりまして、一軍に出られるようになったんです。

当初、便利屋でしたね。どこでも守っていたんです。たとえば、外人選手をファーストとしてとると、もし、外人選手が悪かったなら柏原を使おうという具合に。また、だれか故障したときなどですね。外人選手には負けられないようにがんばりましたが、どうしても外人選手には契約金など金をかけているから使わんのですよ。

南海で六・七年目からレギュラーになりましたが、ある程度の成績を残すようになったのは、日本ハムに移ってからですね。

### 野村監督

努力してがんばりましたが、なんととっても野村監督との出会いが大きいですね。親以上にお世話になってます。監督がロッテに行

かれたときは本当について行きなかつた。江川君の場合もそうだけど、この世界はなかなか思うようにいきませんからね。

こういう事がありましたよ。結婚してすぐに、二年続けて春先は成績がいいんですが、夏になるとすぐ悪くなるんですよ。それで野村監督がどうしてだろうと思われたいですね。家庭訪問をうけましてね。「住んでいる場所が悪い。すぐ引っ越せ。」といわれて、わざわざ自宅近くに引っ越させ、マツターマンで指導してくれていたのが、大阪の北新地と南新地の丁度真ん中、歓楽街の中心なんですよ。酒ばかり飲んでいたらわけです。「お前はキャブのときの練習で春先だけもってたんだ。練習をしなればすぐそんなになるんだ。」と大目玉をもらいました。自己管理の大事さを教えて下さったんです。それまで、前の晩酒飲んでも翌日の試合で打てりゃいいだろうぐらい考えていましたから。(笑い)

相手ピッチャー、バッテリーの心理あるいはくせを読むことは、

## 高めよう “四島を返せ” の大合唱



現在、わが国がソ連に返還を求めている北方領土とは、北海道根室沖につらなる歯舞(はほまい)群島、色丹(しこたん)島、国後(くなしり)島、そして択捉(えとろふ)島の四つの島のことをいいます。

なかでも国後島は、北海道本島からわずか十六キロメートルのところであり、その面積は沖繩本島よりも広いのです。

これらの島は、われわれ日本人の父祖が血と汗で開拓してきた土地であり、第二次世界大戦が終わるまで一度も外国に支配されたことのない、まさにわが国土の一部なのです。当時、四島には約三千世帯、一万六千七百人の島民が住んでいましたが、昭和二十二年から二十四年にかけて本島へ引揚げさせられ、以来三十有余年経た今日、いまだ返還されずのまま、す

でに三分の一の人が亡くなり、子、孫の代に移ってきておりません。また、元島民の約八割は、やはり故郷の島に近い根室を中心に北海道に住み、多くは漁業に従事しています。朝に夕にふるさとの姿を間近に見ながら、本土復帰の口を待ち望んでいます。

北方領土の返還要求運動の火は、戦後まもなく元島民を中心に根室にあり、この運動の輪は、しだいに北海道全島から海を渡り、本土に広がっております。各地では、講演会や研修会が開かれ、また、住民集会や街頭での署名運動が行われ、北方領土の返還を求める国民の声が高まってきています。

熊本県においては、二月七日の「北方領土の日」を記念して、昨年、熊本県北方領土対策協会が発足されたことにより、一段と北方四島返還に向かって行政と住民一体となった運動を推進しております。北方領土の返還は国民の悲願であり、国民一人ひとりが、この問題を深く理解し、正しい認識をもつことこそが何よりも大きな力になるのです。

バッターとして大事なことでですね。そのためには多くのデータを集めることです。すると、だいたい傾向というか、くせがわかるんです。ランナー一塁の場合はこんな球を投げるとか、三塁のときはどうだとか。百分百までいかなくてもある程度予測できた打ちやすいですからね。

昨季の珍プレーといいますが、西武の永射投手の敬遠の球をホームランにしてみました。このときも永射投手にちょっと声をかけて油断させて。(笑い)

### ファン獲得

十二球団の選手会の副会長をやっているんです。シーズン終了後バリーグの選手会を開いたところ一シーズン制にもどうとうという意見が出たんです。スケジュールが過密になり選手の体に無理がくるというわけですね。しかし、バリーグはどうしても観客動員数でセリーグに負けてしまいます。だから二シーズン制にして、刺激を二つもっていった方が、観客を動員できると思うんです。プロですからお客さんが入らなくては話にな

らないし。それでスケジュールの問題は十分検討してもらおうというところで、今年も二シーズン制です。

子供のファンを獲得しなければダメですよ。子供の観客がふえれば必然的に大人の観客もふえると思いますからね。子供だけで球場に行かせるわけはないし。そのためにはファンサービスをやらなくてはいけないということで、うちのチームなんか野球教室などたびたび開催してますよ。

私たちプロ野球選手は、小・中学生には教えていいんですが、高・大学生には教えることができないんです。小・中学生に教えることは、彼らはまだ腕力あるいは下半身も上半身も強くないのに、テレビ・雑誌をみてカッコだけを気にするんですね。だから、「君たちは速いスウィングで速く走れて遠くへ投げる練習をしなさい。そして人の話をよく聞かなくては、野球もそうだけど何でもうまくいかないよ」とこれだけを言っているんです。

## 民話



### 「ごたべいさん」

(河内)

きさぶろうどんは、塩もん(物)商いをしていました。ばくちと茶屋遊びが好きで、売り上げ金を使いこみ、いつも貧乏でした。家の人には本当のことが言えず決ってキツネに化かされた話していました。

ごたべいさんは、きさぶろうどんの子供達がひもじい毎日を送っているのを可哀相に思い、こらしめてやることを考えました。きさぶろうどんは今朝も暗いうちから塩サバをメイゴ(カゴ)一杯詰めて、木刀(担棒)をギツ、ギツいわせながら熊本の下町まで売りに出かけました。

ダイラ(地区名)の川沿いは、きさぶろうどんのトットツという足音と川の流れる音が聞えるだけの、とても寂しい所でした。後をつけてきたごたべいさん

は、持ってきた笹竹で土手をこすりました。「カササツ」、きさぶろうどんは立ちすくみました。でも何事もなかったで闇の中に吸いこまれていきました。歩き出してしばらくすると、「カササツ、コンコン」と言ったようです。いや確かに音がしました。

きさぶろうどんは腰を抜かし、サバを放り出して、ほうようにして平山(地名)の知人の家に逃げ込みました。しかし、いつもの癖を知っているので知人は相手にしてくれません。

ごたべいさんは、おかみさんに訳を話してサバを売ったお金を渡しました。夕方、ションボリして帰ってきたきさぶろうどんに、おかみさんはニコニコしながら言いました。「キツネの出たろう。」「キョトンとしているきさぶろうどんに又、言いました。

「穴のあるもんには用心しなせ。」きさぶろうどんは、頭をかきま